

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第三十三主日B年

小西広志

2021 年 11 月 14 日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は 11 月 14 日は年間第三十三主日ですが、今日の朗読の箇所をシノドスの教会のあり方と関連づけながら読んで、味わっていきましょう。

わたしたちはどこへ向かうのか？

昨年来の新型コロナウイルス感染症が拡大していくなかで、わたしたちはとても不安になりました。それは、コロナウイルスに感染するのではないかという不安もありましたが、むしろ社会は、世界はどうなっていくのだろうという未来に対する漠然とした不安だったように思います。そして、東京教区の教会もこれまで二度にわたって教会を閉じました。緊急事態宣言のもと感染拡大を食い止めるための措置でしたが、今までに経験したことのない主日のミサがないという現実、教会は、小教区共同体は、この先どうなるのだろうかという不安に駆られたのも確かです。幸い、ネット配信でのミサの中継がありましたので、それを視聴して、なんとか教会につながっておられた方々はたくさんおられたと思います。

一体、わたしたちはどこへ向かっていくのでしょうか？このことを考え出すと不安になります。

わたしの言葉は決して滅びない

今日の福音朗読のイエスさまのひと言に信頼していきたいです。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」(31 節)。多くのものごとは生まれては過ぎ去ります。「泡沫（うたかた）」という言い方がありますが、水に浮いてはあつという間に消えてしまう泡のようなこの世です。しかし、イエスさまのことは滅びない。過ぎ去ることはないのです。なぜなら、人となった神のみことばで主イエス・キリストが語ることばは神のみことばであり、神のみことばにはいのちがあるからです。

将来への漠然とした不安があったとしても、みことばに信頼して生きていけたらよいでしょう。しかも、それが個人的ではなく、信仰の共同体として皆で一緒にみことばに信頼できたらよいでしょう。

四方から呼び集める

もう一つ心に留めたい福音朗読の箇所があります。「そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」(27 節)。「呼び集める」を心に刻みましょう。わたしたちは天の御父から、イエスさまを通じて呼び集められたのです。小教区の共同体におりますとミサの始まる前に信者さんが聖堂に入ってきて、ベンチに座られてホッとした顔を拝見することがあります。いろいろなことがあって、やっと教会に来られたのだらうなど想像します。からだが不自由だったり、病気だったりすると教会に来るのも一仕事です。家庭の務めを一時中断して休日の貴重な朝の時間を教会に来るのはとてもエネルギーがいることでしょう。あるいは、なんとか心を落ち着かせるために教会を目指して来た人にとっては、ホッと安心できる癒しのスポットかもしれません。

教会に来る。と言いますが、実は聖霊の働きのなかで教会に行くようにと促されているのです。つまり、「呼び集め」られているのです。なかには来てやったんだという気持ちを態度で示す方もいらっしゃいます。少し残念ですね。

司祭であるわたしたちも務めだからミサをしているのではなく、入堂の時から祭壇へと導かれて行くのです。

ミサへ、主の食卓へ、イエスさまのもとへ集められているというのを意識させられる場面は聖体拝領です。一歩ずつ、一歩ずつ自分で前に進んでいるかのように見えますが、ご聖体のイエスさまがわたしたち一人ひとりと呼び集めてくださっているのです。

こんな惨めで、罪深いわたしでも神さまは呼び集めてくださるのだと思えるのであれば、そこに感謝と賛美が生まれることでしょう。

星と輝く

次に味わいたいのは第一朗読の最後の箇所です。「目覚めた人々は大空の光のように輝き、多くの者の救いとなった人々はとこしえに星と輝く」(3 節)。フランシスコ会訳は少し違って「賢明な者たちは、大空の光のように輝き、多くの者を義へと導いた人々は、星のように代々限りなく輝く」となっています。どちらがよいのかは分かりませんが、「目覚めた人々」とは死者の中から復活した人々でしょう。復活した人々は、光の源である天の御父から光を受けて輝きます。その姿は、今地上を生きるわたしたちにとって救いとなります。いのちは死では終わらないという希望の光だからです。ですから「多くの者を義へと」導くのです。光を受けた人々は、光を生き、光を照らし返します。その光を受けて、わたしたちも第二朗読にあるように「聖なる者」、「完全な者」とされるのです(14 節)。この「永遠に完全な者となさった」は文法的には完了形だそうです。完了形には現在までの継続の意味がありますから、今もなお、イエスさまの十字架の贖いのわざで「完全な者」とさせられつつあるのです。

まとめ

どこへと向かって行くのか、そして最後にはどのようなになるのか、いつそれが起こるのか、よく分かりません。ただ言えることは、教会が「完全な者」となるようにと方向づけられているという事実です。その教会に「呼び集め」られて、わたしたちも教会のメンバーと共に「完全な者」となるように歩むのです。完成へと向

けた歩み、これがシノドスの教会の姿です。

最後に、わたしは今日、小教区のミサで七五三のお祝いをしました。小学生までの子どもたちとその家族を祝福しました。子どもたちとその家族が成長していく様子は小教区の共同体にとって大きな喜びです。その際に不思議のメダイを子どもたちに贈りました。わたしは子どもの頃「このメダイをつけた兵隊さんは、戦争中でも弾が当たらなかったんだよ。マリアさまが守ってくれたんだよ」と言われたのを覚えています。子ども心にそんなはずはあるものかと思いましたが、その言葉を信じました。そして今も信じています。不思議のメダイをつけた人はマリアさまと共に歩むのです。「弾が当たらなかったんだよ」の言葉は信じられませんでした、その言葉を真剣に語ってくれる教会の大人の人を信じました。言葉を信じて、言葉に頼って生きている人がいる。この事実は、どんな宗教的な態度よりも立派なものです。「わたしの言葉は決して滅びない」というのはこういうことを指すのでしょうか。

それでは、また来週。